受賞作品

【一般建築部門】

最　優　秀　賞

平野純薬本社ビル

設計者：ＩＧ設計室　　五十嵐　啓

施工者：技建工業（株）

優　秀　賞

時を語る家

設計者: アイ設計事務所　堀内　泰伸

施工者: 永森建設（株）

【住宅部門】

最　優　秀　賞

大森の家

設計者：住まい工房設計室　山　祐 三

施工者：（株）住まい工房

優　秀　賞

松本の家

設計者：一級建築士事務所 吉田建築デザイン

吉田　勝則

施工者：（株）ウエキグミ

優　秀　賞

西方の家

設計者：小笠原 弘建築計画

小笠原　弘

施工者：（株）活衛工務店

第２回ふくい建築賞2015　報告

ふくい建築賞実行委員会
瀬戸川　信 之

昨年建築設計３団体により創設された「ふくい建築賞」は、２回目の開催となります。本年度は一般建築部門８点、住宅部門10点の合計18点の作品応募がありました。

９月25日一次書類審査が行われ、一般５点住宅５点の計10点が二次審査対象作品に選ばれました。二次審査は10月９・10日の２日間にわたり、現地見学とヒアリング、審査の結果、一般部門では「平野純薬本社ビル」と「時を語る家（住宅展示場）」の２点が、また住宅部門では「大森の家」「松本の家」「西方の家」の３点が最終審査対象作品に選ばれました。

そして11月28日、県立図書館多目的ホールにおいて約80名の市民や学生が見守る中、最終審査会が開催されました。ノミネートされた計５作品の設計者により、作品のプレゼンテーションが行われ質疑応答を経て、３名の審査員によりそれぞれの作品の魅力や課題が熱心に議論されました。

そして審査委員の投票の結果、

一般建築部門：「平野純薬本社ビル」（設計者：五十嵐啓氏）

住宅部門：「大森の家」（設計者：山　祐三氏）

以上の２作品が名誉ある最優秀賞に選ばれました。その後の表彰式では施主、施工者にも賞状が贈られました。

審査会に先立ち、審査委員長を務める金沢工業大学教授　水野一郎氏により「地域と建築」と題した講演会も開催され、氏の設計活動拠点である石川県を中心に様々な建築作品を紹介しながら、地域の文化や景観を生かした建築設計の実践が語られました。

最終審査に残った５作品は個性的かつすぐれたものばかりで、福井らしい風土性や施主、施工者を含めた良好な関係性がうかがわれました。また密度の高い設計コンセプトと、それを建築という形にして

現地審査

ゆく情熱も感じられ、「ふくい建築賞」にふさわしい熱気に包まれた公開審査会になったという感想を持ちました。

この建築賞がこれからも永く続けられるよう、皆様のご理解と温かいご支援を心よりお願いしたいと思います。第３回目となる今年も会員のみなさまの応募参加をお待ちいたしております。

公開審査会

授賞式記念撮影

■ 第２回 ふくい建築賞2015　総評

審査委員長　水野一郎（金沢工業大学）

第２回「ふくい建築賞」のテーマである「優れた建築とは何か」「福井にふさわしい建築とは」について審査の間中考え続けていました。昨年の第１回の最優秀選考に残った６作品は設計者と施主とが綿密に話し合いを積み重ねて生まれた作品ばかりでした。それゆえに、施主と設計者が立地環境の中にいかに建築を存在させるか、建築自身が持つ個性をいかに明確にしてゆくかを共有していて、これが福井らしさかなと思っていました。

今年最終選考に残った５作品もそれぞれ機能も立地環境も設計内容も驚くほど異なっていますが、設計者と施主、建築と環境、機能とデザインがそれぞれのスタイルで調和していることは共通していました。

一般建築部門の「平野純薬本社ビル」は施主の強い意志と共に内部空間のクリエイティブなしつらえと外部空間のランドマーク的構成が印象的でした。設計作業の段階で建築学生との対話を繰り返し、アイディアをピックアップしてゆく自由さもユニークなクリエイションと思いました。

「時を語る家」は住宅展示場のモデルハウスであり、建築賞の対象になりにくい建築でしたが、収集した民家の古材を適所に使用しながら、おおらかで骨太な、しかも随所に美しいプロポーションと陰影のある空間、モダンなしつらえを見せていて、見学者を引き込む力を有していました。

住宅部門の３件はいずれも設計者、施主、環境が異なることを反映した住宅建築をそれぞれに生み出していました。

「大森の家」は田園的環境の中に穏やかで美しい建築と庭園を築いていました。建築は伝統的な在来工法でありながら各室や庭がつながり、吹き抜けを介して２階から屋根裏まで立体的にひろがるモダンな生活空間になっていました。また、３世代同居を通り庭的空間で分離と連結を共存させていることや施主、施工と設計の３者がチームとなって築いてきた経過も興味深いものでした。

「松本の家」は都心の短冊状狭小宅地に建つ住宅です。容積率、建ぺい率が厳しい中で、ギリギリの３階建てボリュームを構え、その中心に置いた軽やかな鉄骨のらせん階段が動線と光と風の筒となっていました。間口の狭い正面を補うように壁面を斜めにしてひろがりを持たせていることも成功しています。建設から時間が経過しているにも拘らず、美しく保たれているように、施主と設計者との間の信頼関係も好感を抱かせました。

「西方の家」は中庭型のコートハウスで内外共、コンクリート打放しが特徴です。さらに特徴的なことは、住宅を構成する居間、食堂、個室などの壁はコンクリートの箱であり、中庭の廻りに配されていますが、つなぐ廊下はなく、代わりにその役目を外部空間である中庭が担っています。その結果、この

家での住まいは常に外部空間的であり、雨、温度、風、香り、気配などとの対話が日常生活です。このような空間に到達するには施主と設計者のコンセプトの煮詰めと生活しながらの対話の積み重ねがあったからでしょう。

以上の作品のなかから最優秀を公開審査にて選びました。それぞれ個性があって優れた建築になっている状況のなかで最優秀を選ぶことへの迷いは昨年同様今年もありましたが、コンペ的営みとして審査員３名の投票で決めることも意味あることでしょう。

投票の結果、一般建築部門に「平野純薬本社ビル」、住宅部門に「大森の家」が選ばれました。投票に際して、審査員３名共各作品に僅差しかなく、悩んだ結果であることも報告します。そして何よりも「優れた」「福井らしい」とは地域の素材や環境に密着しながら、施主、施工、設計の３者が対話を積み重ねて居心地よく個性的な建築を生み出す創造性なのではないでしょうか。それは福井県が住み良さランキングで実質的な生活環境や家族コミュニティなどの評価が常に上位に位置していることと類似しているように思います。

■ 第２回 ふくい建築賞2015 の審査を終えて

審査員　吉田　純一（福井工業大学）

古建築や歴史的建築を研究テーマとする建築史分野に浸っている私にとって、新しい建築や現代建築の良し悪しを評価することは心労が伴う作業であるが、昨年の経験が生きたのか、今年度はいくらか余裕をもつことができた。前回も触れたように「建築 ＝ 建物 ＋ 人」の持論にブレはないが、今年度は「建物をつくる側の意欲と使い手側の思いが作品にどのように表現され、そしてそれらが如何に調和しているか」という指標を設定して審査に臨んだ。

一般建築部門は、昨年より６点減の８点しかなく、そのうちの３点は建築形式からみれば住宅であり、いくらか物足りなさを感じた。その中で最終審査に残り優秀賞に輝いたのは「平野純薬本社ビル」と「時を語る家（永森建設高柳展示場）」である。審査前には昨年同様３件の選出を想定していたが、３件目に該当するものが見当たらなかった（ここにも低調さが表れている）。２点のうち最優秀賞を得た「平野純薬本社ビル」は、白を基調にモノトーンで全体をまとめ、事務室や社員食堂、屋上デッキなどを巧みに配し、ファサードも全面ガラスを用いてすっきりまとめ、周囲の景観にも大きなインパクトを与えている作品である。学生や建築主の意向を巧みにまとめ上げた設計者の能力、デザイン力の高さに敬服するが、ひとこと苦言を言わせてもらうならば、無難にまとめすぎていて、私の基準である「つくる側の思い、創作意欲」にやや物足りなさを感じた。これに対し「時を語る家」は、つくる側の思いや意欲は十分に感じられたが、展示場ということもあってか使う側の思いが感じられなかった。

住宅建築部門も応募は昨年度より４点減の10点であった。このうち５点を２次審査対象として現地審査を実施、その中から「大森の家」、「松本の家」、「西方の家」の３点が優秀賞に選定された。この３点はそれぞれ特徴をもち、甲乙つけがたいものであった。どれを最優秀賞に選ぶべきか正直迷ったが、つくる側の意欲と使う側の思いが随所に伺え、かつ両者の思いがぴったり合致、調和していた「大森の家」を選んだ。結果的にはこれが２票を獲得し、最優秀賞に選定された。選には漏れたものの、「松本の家」は町中の短冊型の狭い敷地にもかかわらず、光階段を採り入れ明るく、狭さを感じさせない空間が創出されていて、いわば「現代町家」の秀作である。また「西方の家」はRCの箱型の中央部を繰りぬいて中庭をとり、これを介して周囲の居室をつなぎ、かつ土間床生活を提案するといった一般には受け入れがたいかも知れないが、建築が新たなライフスタイルを提案するという画期的な作品であった。ただし、両作品ともにつくる側の意欲が使う側の思いよりやや勝っていたように感じた。ともあれ応募件数は減少したものの、選外のものも含めて今回の住宅建築部門の内容は昨年より上回っていたと思う。

次は３回目。歴史を振り返っても、３代目が優れていた足利幕府や徳川幕府は、その後も長期間政権を維持したが、だめだった鎌倉幕府は短期政権に終っている。「ふくい建築賞」の今後を占う意味でも次の３回目がその分け目になりかねない。応募件数・内容ともに初回・２回目を大幅に上回り、「ふくい建築賞」の確固たる礎が築かれんことを、そして福井の建築や建築界の発展に大きく貢献・寄与していくことを願ってやまない。

■ 第２回ふくい建築賞 2015 の審査を終えて

審査委員　髙嶋　猛（福井大学）

第２回ふくい建築賞も滞りなく授賞式を終了し、受賞された方々には今後の励みとなることを、惜しくも受賞を逃された方には今後のますますの奮起を願っています。

今年の建築賞の審査にあたって考えたことを少し述べたいと思います。他の建築の審査でも時々話題になりますが「福井の建築ってなあに？福井らしい建築ってなあに？」がやはり頭をもたげてきます。

では、大都市の中心地区で建築賞の審査を行う場合に、このような観点がどのくらい審査の際に話題になり、関係してくるのでしょうか。もちろん、建築は場所を読んで建てることが大切だと思いますし、建築する場所の違いによって異なる答えがあると思います。それが〇〇という地域の建築らしさになると思いますが、それは長い歴史の中で培われるものでしょうし、最大の要因は風土性にあると思います。ある時代に建築する場合、その時代に最善だと考えられる手法や技術や材料が選択され、受け継がれてきていると思います。風土性と行政単位とが必ずしも一致していない状況で〇〇らしさを求めるのはキャッチフレーズとしてはわかりますが、全ての建築に求めるのは無理だと思っています。

このことから、今の時代で考えられる知恵や技術等を活かしてどのように創られているか、受け継がれてきたものがしっかり考えられているかという観点で建築賞の審査に臨みました。また、審査することは審査されているということでもあるので、この視点がぶれないように心がけています。

最終審査会で講評した作品について、私なりの評を述べたいと思います。（順不動）

□一般部門

● 平野純薬本社ビル

市街地郊外に位置し、５階建ながら周囲とは一際高い。その利点を活かして上階に明るい執務空間を実現し、特に大きなモニュメントツリーでつないだ事務室とその上層の会議室等の空間は共感できる。外観では西側の駐車場とも一体となった外部構成も特筆できる。ただ、カーテンウォールのディテール、室内での自然木の採用への挑戦があればさらに良かったと思う。

● 時を語る家

古材を何とか活かして新しい空間を創造しようという強い意気込みが感じられる展示場で、木の持つ迫力が伝わる建築である。玄関ホールの壁下部の大きな横長の開口部の扱いも心地よい。ただ、木の良さの活かし方を考えた時、木部を濃い色付けで仕上げた空間だけでなく、伝統を伝えるためには素木への眼差しを持った空間も必要でなかろうか。

□住宅部門

● 大森の家

山が迫る集落の一画に、手入れが行き届いた前庭を持った落ち着いた外観を見せている。玄関を勝手までの通り抜けの土間として、母家と離れをゆるやかに仕切る構成や、内部の素材やデザインも伝統的で穏やかな構成を基調としている。大胆な垂木構造の小屋組の構成も取り入れるなど、完成度が高い建築であるが故に、これ以上明るさを要求するのは欲張りであろうか。

● 松本の家

新築から約10年を経過した市街地の３階建て住宅である。南側道路に面した前面外壁を東に斜めにカットして大きくし、内部中央に設けた階段に設けたトップライトからの光とあわせて、採光条件の悪い敷地に様々な手法を駆使して快適な空間をコンパクトに演出している。立地上、町中に埋もれる宿命を持った建物であるが、市街地住宅の一つのありかたを提示している。

● 西方の家

住まいのあり方を考えさせられる住宅である。外観からは閉鎖的に見えるが、住宅の原型に限りなく近く、原型に少し手を加えてその中で家族が生きている。現代の「便利な」ものを受け入れながらも、あえて原点にもどろうとしているような住宅であった。明るい光を避け、朝の光を少し離れて見ているようなそんな住宅であった。現代の生活に慣れている私には生活の実感が想像できないが、案外快適なのであろう。

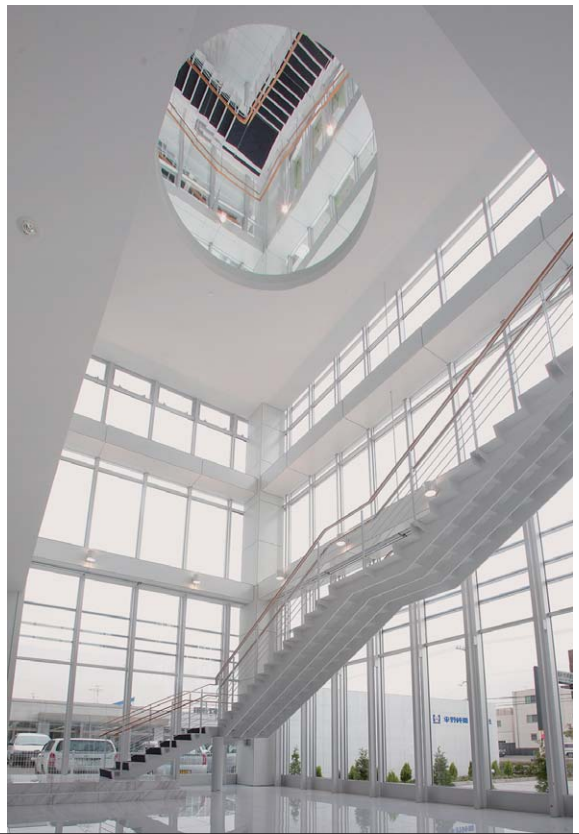
平野純薬株式会社

設計監理：ＩＧ設計室
施　　工：技建工業㈱

建築位置：福井市下馬
工　　期：'08年12月～'09年６月
構造規模：鉄骨造・地上５階
敷地面積：2,234 ㎡
建築面積：1,096 ㎡
延べ面積：2,345 ㎡

福井市下馬に建つ、医薬品販売会社の本社ビルである。オーナーと福井工業大学の学生達のアイデア・努力が計画の大きな原動力となって計画が進められた。

県立図書館と市立美術館という、福井を代表する建築との関係性を意識し数多くの模型やＣＧを制作しながら外観・インテリアの決定が行われた。コンセプトは「近未来」。若さあふれるエネルギーとチャレンジ精神・スピード感をテーマとする企業の本社としてふさわしいデザインを追求した。



時を語る家

設計監理：アイ設計事務所
施　　工：永森建設㈱

建築位置：福井市高柳
工　　期：´09年６月～´12年５月
構造規模：木造・地上２階
敷地面積：652 ㎡
建築面積：273 ㎡
延べ面積：294 ㎡

時代の流れと共に消えつつある、住まいづくりに欠かせない貴重な財産。それは、何百年も住まいを支え続ける良質な木材、それを育む地元の山林、気候風土に根ざして培われてきた産業、職人技術、そしてそれらを守り続けてきた先人の想いである。

この「時を語る家」は、古民家から再生した樹齢約 300 年の古材と福井で育った新材、越前瓦、越前和紙などを使用。職人技を活かす自然素材と伝統工法を用い、古材と新材、伝統技術と新しい技術、伝統的生活様式と現代の生活様式、様々なものが融合し合いバランスを保ちながらその美を感じることのできる、懐かしくて新しい住まいである。

古材が使われてきた歴史に新しい時を重ねていく、悠久の家。住む人が誇りを持って受け継いでいく住まいづくりは、有形無形の財産として次の世代に受け継がれていく。

大森の家

設計監理：住まい工房設計室
施　　工：㈱住まい工房

建築位置：福井市大森
工　　期：'09年４月～'10年11月
構造規模：木造・地上２階
敷地面積：360 ㎡
建築面積：142 ㎡
延べ面積：186 ㎡

『大森の家』に住まわれているご家族は、ご夫婦とお義母さん、県外にいるお子さんの３世代。玄関から延びる通り土間で緩やかに区画し、ひとつ屋根の下に住まいながらもそれぞれの時間も楽しめる心地よい距離感を保った２世帯住宅となっています。

「環境共棲」をキーワードに、山々に囲まれ、田畑が残る自然豊かな風土に調和する、切妻屋根の落ち着いた外観とし、もともとの主庭を最大限に生かした配置となっています。

主庭を囲むように居間とお義母さんの和室を設け、積極的に窓を開けることで、風通しが良く、自然の恵みを感じながら暮らせ、蒸し暑い夏でもエアコンに頼り切ることなく過ごせます。

躯体には、福井県の良質な杉材を使用し、棟梁の手刻みによる伝統的な技法を用いて、越前間の真壁工法で組み上げられています。少なくとも100年は住み継いでいける丈夫な骨格となるだけでなく、間取りと架構を整合させることで、古色の木組みと白壁の対比が美しくどこか懐かしい「レトロモダン」な室内空間となっています。

また、構造以外にも、福井の杉、越前瓦・越前和紙・笏谷石など地元の材や古材を積極的に用いて、全て手仕事で仕上げられています。化学物質を一切含まず、調湿作用のある天然素材に囲まれた住空間は、言葉では言い表せない安心と心地よさを感じさせてくれます。

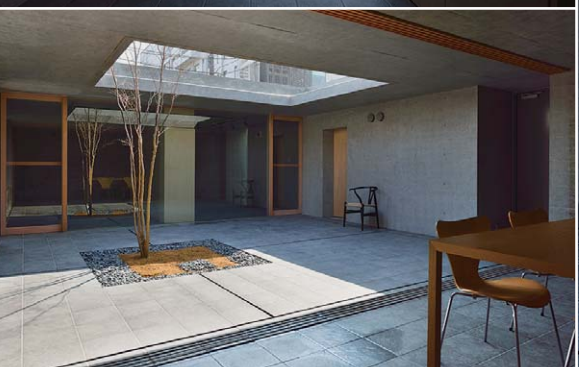
松本の家

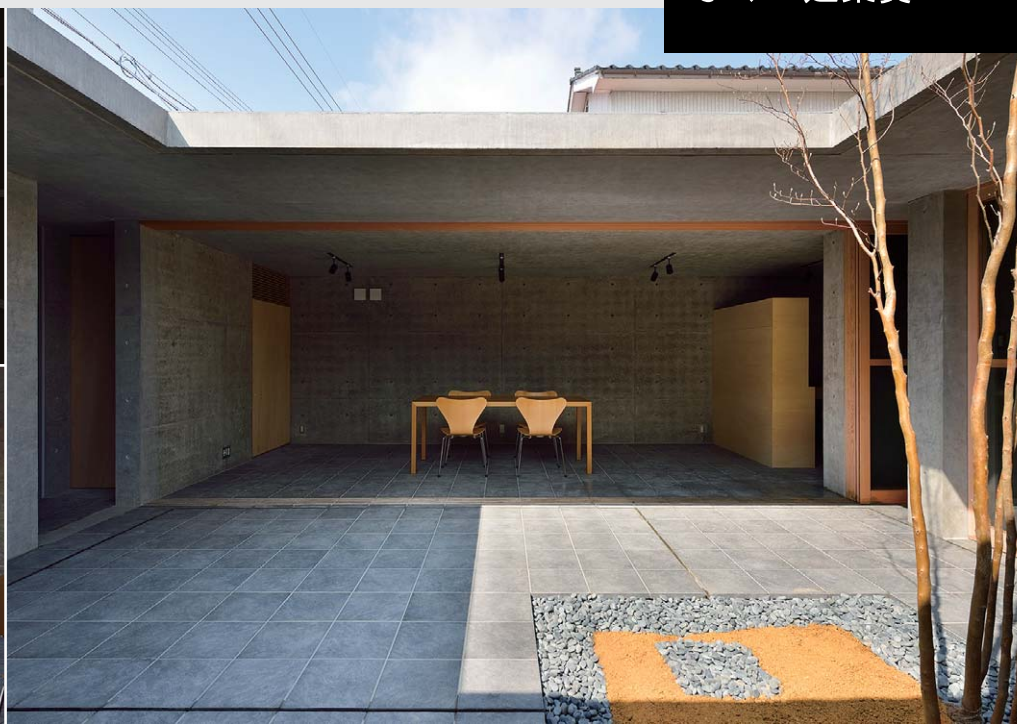
都市に住む・狭小住宅のすすめ

設計監理：一級建築士事務所 吉田建築デザイン
施　　工：㈱ウエキグミ

建築位置：福井市松本
工　　期：´05年４月～´05年９月
構造規模：鉄骨造　地上３階建（準耐火構造）
敷地面積：　68 ㎡
建築面積：　40 ㎡
延床面積：115 ㎡

福井市中心部の北寄りを、東西に抜ける幹線道路から少し北へ入った住宅密集地に建つ、小さなすまいです。敷地は南側の６ｍ道路に面した以外３方を間近に迫った隣家に囲まれ、間口2.8間奥行き７間の小さな敷地（20坪）の上、準防火地域の制約もある。厳しい環境や法規制の中で限られたボリュームをいかに広く快適な空間とするかが課題でもあるが、小ささ故に住まいの本質的な快適性を濃縮された形でしつらえられた空間では、狭くても居心地の良い豊かな生活を楽しむことができる。

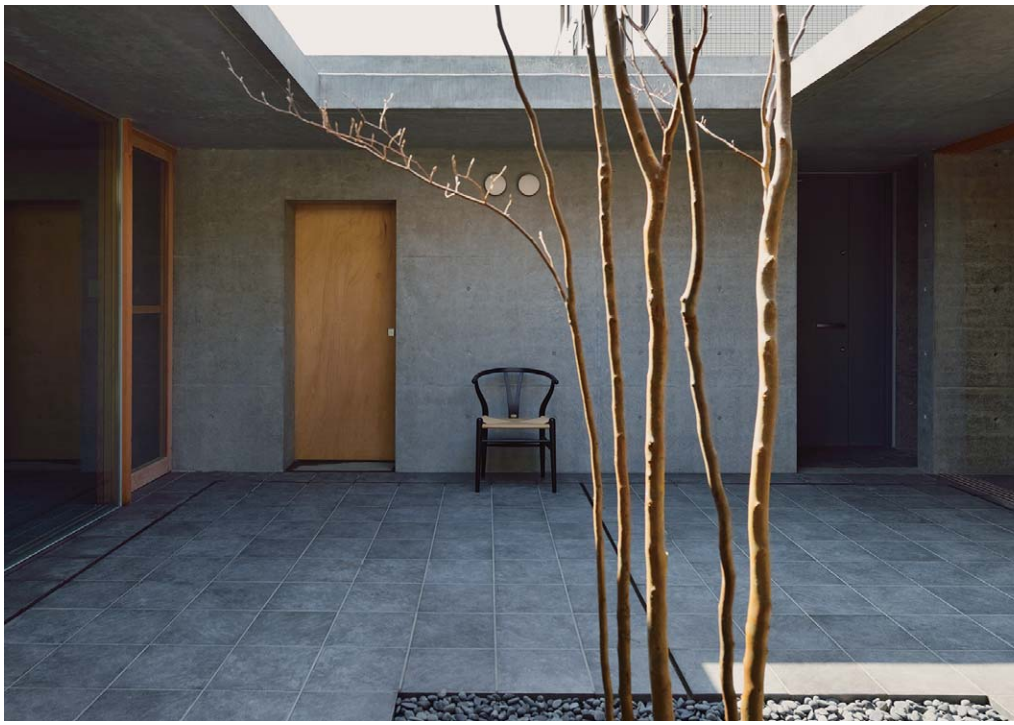




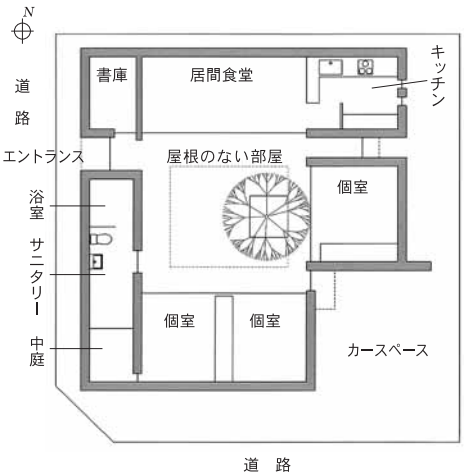
西方の家

設計監理：小笠原弘建築計画
施　　工：㈱活衛工務店

建築位置：福井市西方
工　　期：´13年４月～´14年４月
構造規模：RC造・地上１階
敷地面積：199 ㎡
建築面積：　97 ㎡
延べ面積：　99 ㎡



内部にあって外部、外部だけれども内部。屋根のない部屋です。

屋根のない部屋を中心に配置し、各内部空間エレメントを配置します。各部屋相互間の移動は、全て屋根のない部屋を通って行き来します。それにより、余計な壁、開口部が無くなります。各部屋の息遣いが、そこを通して伝わり、家族の拠り所として存在すると考えました。

屋根のない部屋と言っても、雪降る福井の気候では、どこかの傘をささずにとはいきません。そこで、土縁のような庇を出すことにしました。それと共に、居間食堂との開口部を全引き込み戸とし、多湿、積雪地である福井において、四季を通して自然と一体になれる空間としました。